資料 3

指名コンペティションの結果について

第 19 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展－日本館キュレーター指名コンペティションにおいては、6 名の候補者に参加を依頼したところ、うち 4 名からご提案をいただき、最終選考の結果、青木淳氏がキュレーターに選出されました。

氏名	展覧会テーマ
青木　淳（AS Co Ltd. 共同主宰）	中立点　－　生成 AI との未来
惠谷　浩子（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　文化遺産部景観研究室　室長）	耕起される風景、建築の根っこを掘り起こす Tilling Landscapes: Archē in Architecture
木下　壽子、吉見　千晶 （一般社団法人住宅遺産トラスト）	Embodied intelligence - Space, Time and Home 家。彼女たちの時間のかたち
宮内　智久（京都美術工芸大学 建築学部 教授 / 株式会社宮内智久建築都市研究所一級建築士事務所 代表）	「ジャパンネスの庭から」 コスモポリタン建築の超文化的解釈

（候補者氏名五十音順、敬称略）

選考委員会の講評は次頁のとおりです。

選考委員会

委員長：　三宅　理一　（東京理科大学客員教授）
委員：　篠原　聡子　（日本女子大学学長、空間研究所代表）
西沢　立衛　（横浜国立大学大学院 Y-GS 教授、西沢立衛建築設計事務所代表）
保坂　健二朗（滋賀県県立美術館ディレクター）
宮城　俊作　（PLACEMEDIA パートナー、前東京大学教授）

講 評

第 19 回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展（2025 年）の日本館展示を実施するにあたり、建築展事業委員会において展示キュレーター候補者を絞り選考を行った。

本年より選考手順が大幅に変更となる。従来、選考委員（事業委員が兼任）がキュレーターの推薦から決定までの流れを一元的に扱っていたものを、今回より候補者推薦と最終候補者選考のプロセスを明確に区分することになった。前者では推薦委員 17 名に展示キュレーター候補の推薦を依頼して候補者リストの作成を行い、後者では、そのリストにもとづいて選考委員が候補者を絞り込み、指名コンペティションを通して最終候補者を決定する。コンペティションに際しては候補者に企画提案書の提出を求め、プレゼンテーションを行う。

候補者の推薦については、推薦委員から 28 名（組）が推薦されたが、そのうち 2 名は事業委員であったため、リストから外れ、最終的に 26 名（組）が推薦リストに残った。事業委員会ではこのリストにもとづいて書類選考（第一次審査）を行い、その結果、6 名（組）の候補者が絞り込まれた。事務局からの打診に対して 4 名（組）が指名コンペティション（第二次審査）への参加希望を表明したことで、それぞれが企画提案書を提出し、対面で 45 分のプレゼンテーション（発表・質疑応答）を行った。コンペティションに参加した候補者は以下の通りである（発表順、敬称略）。

（1）　青木淳
（2）　木下壽子、吉見千晶
（3）　惠谷浩子
（4）　宮内智久

以上 4 名（組）全員のプレゼンテーションが終了した後に、選考委員の間で最終選考が行われた。以下、第二次審査における議論の要点を記す。

青木淳氏が掲げたテーマは「中立点－生成 AI との未来」で、ビエンナーレ総合ディレクターの設定したデジタル化時代に建築がどう対応するかという問いかけに直接答えるかたちとなる。青木氏のコンセプトは、生成 AI が現代社会のあらゆるところに入り込み、社会のあり方自体が揺らいでいる状況に対して、あえてそこから一歩引き AI と人間との間の「うつろなる中立点」を措定することにある。日本古来の「間」の概念を参照しつつ、この中立点にこそ新たな創造の可能性があるという、やや難解ではあるが哲学的な命題を引き受けて建築に到る点で特徴的である。

このプロセスを展示として完成させるため、キュラトリアル・アドバイザーとして家村珠代氏を指名し、出品作家としては藤倉麻子＋大村高広両氏と砂木（木内俊克＋砂山太一両氏）によるチームを編成し、建築家とアーティストのコラボレーション体制をつくる。AI とリアルな世界との

「対話」の結果が展示物となる。フィクションとリアリティとの間を行き来するためその内容は予想不可能であるが、その蓋然性こそが今の時代を表すといってよい。「原っぱ」論以来の「うつろ」な存在を提唱してきた青木氏らしいこの発想は選考委員の高い評価を得たが、現実問題としては、対話による設計プロセスとそこで得られたデザインを日本館に実装する「アクチュアル」な作業との兼ね合いが難しく、その点に質問が集まった。また、今回に限っては総合ディレクターの方針に対応すべく各国から同様の提案が多く寄せられるとの見方もあり、この「中立点」という考え方をグルーバル・コンテキストの中でどこまで敷衍し、世界をリードしうるかが今後の課題であろう。

木下壽子氏＋吉見千晶氏が提案するのは、両氏が中心となって活動を進めてきた「住宅遺産トラスト」の成果を国際的に展開する点にある。何気ない日常性が反復される住空間を「時間のかたち」と規定し、3 つの具体例（園田邸、林・富田邸、三澤邸）を選んで住まい手の声を引き出し、映像とインスタレーション（しつらえ）によって展示を行うことが提案された。そのためにサウンド・アーティストとして鈴木昭男氏、インスタレーション作家としてホセイン・ゴルバ氏と中谷芙二子氏が作品を制作する。

企画者が選んだ 3 つの住宅は、それぞれ吉村順三による正統派モダニズム、積水化学＋大野勝彦によるプレファブリケーション、日本館の設計者たる吉坂隆正の設計と、日本の近現代住宅史の中でも特異なポジションを有するもので、その着眼点はすぐれている。展示されるのは映像、家具に加えて出展作家の作品となる。ただ、その内容に関し、存在感のある中谷氏の霧の彫刻の位置づけが不明、あるいはインタビュー映像の主人公としてなぜ女性にこだわるのかといった質問が続く。良い素材を発掘しながら、その表現においてグローバルな切り口が弱い点が眼についた。

恵谷浩子氏の掲げるテーマは「耕起する風景、建築の根っこを掘り起こす」というやや不思議な響きをもつ。アグロ=ランドスケープの考え方を前面に出して、土の下の見えない世界を掘り起こすことで土俗性を強調する。今回の総合ディレクターの指針とは真逆の発想といえよう。制作手順としては、里山制作団体つち式（奈良）、のがし研究所（石川）、銭湯山車巡行部（東京）の 3 グループの活動をリサーチし、展覧会前に書籍を完成させる。その内容を日本館での映像、インスタレーションとして展開する。日本館の空間に応じて、一階（ピロティ空間）を土の下、二階を地上に見立ててインスタレーションを行うが、要素が多く、その関係性が把握できない。楽しいことは楽しいのだが、びっくり箱がいくつもでてくるような雑然とした印象はぬぐえない。

最大の問題は、展示構成とコンセプトの整合がなされていない点で、たとえば土の中と想定される一階に突然テンセグリティが登場するのがその典型だ。文化的景観を長年追求してきた恵谷氏の姿勢には共感できても、それを展覧会として完成させる方法には不安を感じる。また、書籍を展覧会に先だって制作するスケジュールは、準備時間と資金の配分から無理があるとの指摘があった。展覧会としての未熟さがプラスにもなりまたマイナスにもなるとの印象であるが、考え方そのものは将来性を秘めている。

宮内智久氏の提案は「ジャパンネスの庭から」と題した提案を発表した。日本の建築を敢えて日本の外からから眺め、従来に日本論にはなかった視点を「ジャパンネス」なる用語にこめて展開するアイデアである。チームの布陣も、キュレーション経験の豊かな鐘書盈（シンガポール）、江本弘（京都）の二氏を中心に編集者・写真家・アーティストなどを集め、なかなか賑やかな顔ぶれである。間口を大きく広げてヴィジュアル・テキスト両面で多彩な日本論を収集し、それを展示へと変換するのが特徴だ。都道府県数（あるいは忠臣蔵）に対応する「47」がキーワードとなって出展者、そして学生ワークショップの参加者が選ばれる。浮世絵に見立てた風景のパッケージ（四十七景）が制作される点で、確かに日本仕立てのパノラマである。会場の中心には利休の待庵の「写し」として「耐震模型＝耐庵」が展示される。

この考え方の背景には、宮内氏がシンガポールで行ったさまざまな実験が控えており、新たなガイドブックをつくるかの如く軽やかに日本の風景に切り込んでいく様はきわめて興味深い。ただ「ジャパンネス」は磯崎新氏によるポンピドーセンターでの展覧会の主題であり、国際的に既に流通しているこの用語を反復する点で新鮮さを欠くのは間違いない。カタログ的な表層性が強調され、どこまで本質に迫りうるかも問われる。さらに、47 人（組）の多岐にわたる出展者の調整、資金配分など物理的な問題もあり、やや風呂敷を広げすぎた感があるのは否めない。

プレゼンテーションに際して各候補者に対して質疑応答がなされ、さらにプレゼンテーション後に選考委員 5 名の間で議論がなされた。その結果、展覧会としての完成度、メッセージの強さなどが勘案され、選考委員全員の一致をもって青木淳氏の提案が最終候補として選ばれた。

（五十音順、敬称略）

推薦委員　　ケン・タダシ・オオシマ

太田　佳代子

大西　麻貴

貝島　桃代

門脇　耕三

北山　恒

ウスビ・サコ

ブノワ・ジャケ

謝宗哲

妹島　和世

トーマス・ダニエル

ピッポ・チョッラ

中村　拓志

西牧　厚子

アズビー・ブラウン

前田　尚武

山名　善之